
勇者じゃない勇者のRPG

るーびっく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者じゃない勇者のRPG

【Nコード】

N1552V

【作者名】

るーびっく

【あらすじ】

オンラインゲームの中の無数の勇者たち。彼らは苦も無く勇者になれたわけではない。彼らはゲームの中のプレイヤーは知ることのない“勇者選抜試験”によって選出されたエリートたちである。しかし試験があるということはそれに落ちる者もいる。この物語の主人公・勇者候補生21032号は5回の選抜試験に落ち、裏マップに存在する落第監獄で敵キャラにリサイクルされるのを待っていた。だがその監獄で監査バグプログラムの少女に出会ったとき、彼の大きな勇者ではないRPGが幕を上げた。

【お知らせ】
無し。

第1話 【勇者じゃない勇者の出会い】（前書き）

どうも。

今回は見ていただいてありがとうございます。

今回は初投稿ということもあり不安定な文章ですが、どうぞ暖かく見てやってください。

世界観が微妙なので何とも言えないですが、よろしくお願いします。

第1話 【勇者じゃない勇者の出会い】

勇者っていう職業にもさ適性があつてさあ勇者になれない勇者は最終的に“敵キャラ”にリサイクルされるんだってさww

なんて話が俺たちの仲間内で流行っていたところが懐かしい。

適性試験が一回終わるごとに仲間が1人、また1人と勇者の職についていく。

だが俺はというと：

勇者適性試験の4回目も落ちていた。

でもまだ1回ある。

5回目で合格できればいいんだ。

そんな安易な考えが俺の脳裏に充満していた。

そんな安易な考えで1年間を過ごす。

それでどうなった？

第304回勇者適性試験合格者番号に俺の番号は無し。

ついにやってしまった。

5回目の試験に落ちてしまった。

それでどうなるって？

5回目の試験に落ちた勇者候補生は、勇者になる資格を持つことが出来なかった失敗作として、敵キャラにリサイクルされますww

「オウマイゴオオオオオオドツ！！」

んで、今俺はゲームマップには映らない裏マップの“落第牢獄”に閉じ込められているところですよww
周りには勇者になれなかった失敗作達が鉄格子のなかで苦しみがいている。

「まさかな…この俺が勇者になれないなんて orz」

俺は天井の剥き出た岩から滴り落ちる水を頭に浴びながら、今までの出来事を思い出す。

周りの勇者（仮）も同じことを考えているだろう。

「勇者候補生10025番外に出ろ！」

「やだあああああ！！俺はまだ死にたくねえええっえ！！！」

はあ…気の毒に。

前の牢獄からぼろぼろの身なりをした勇者候補生が、両脇から腕をつかまれ連行されていた。

俺もいつかはああなるのかな。

でもあいつ…クネクネした植物みたいな敵キャラになりそうだな…
ぷふッ…。

不謹慎だが、笑いがこみあげてくる。

コッ…コッ…コッ…

ん？あれ？また来るぞ？

しかも俺の牢の前で足音が止まったぞ！？

「勇者候補生21032！！」

俺の番号が呼ばれる。

一瞬呼吸が止まった。

「は…はい…」

俺の声はもう聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声しかでなくなっていた。

死んだ…死んだお…

「勇者候補生21032！！貴様の牢に今日から1人追加だ！」

「へ！？俺、まだリサイクルされないの？よかったあ」

看守が牢の鍵を開けて布に包まれた人型、たぶん勇者候補生であろうそれを俺の牢に放り込む。

「仲良くしてやれ。まあ短い命だろうけどなあww」

看守はニマアっと笑いながら捨て台詞を残して去って行った。
なんだかむかつくなあ。

ったく！人の命をなんだと思ってるんだ！！と言いたかったがこれ
言うとりサイクルが早まりそうなのでやめておく。

さて。

俺は布に包まれた人型のそれが気になり、突っついてみる。

「…んんッ」

…え？

もう一回。

「…んんッ」

…やばい。

その柔らかさ。

どことは言わない。どことは言わないが、しいて言うならば胸部。
神様は死ぬ前になんてものを…

これは、いただきます！してもいいのかなあ。

俺は息をのむ。

そしてかかっていた布を外す。

そこにあっただのは、黒いロングの白いワンピースを着た小柄な少女であった。

ゴクッ

「ハアハア…… いっただっきまああすううう」

スッ！

「えっ!？」

俺が飛びつこうとしたその瞬間、彼女が勢いよく起き上がった。
バキッ!!

反動のついた頭部と俺の顔面中央に衝突。

「ギアアツアアス」

もちろん激しく流血?
主に鼻のあたりから。

ドボドボ

血が止まらんわ。
俺が止血作業をしていると、彼女はようやく俺に気付いたのか俺の

事を冷ややかな目で見つめる。
んで、一言。

「なにやっているんですか？」

彼女はニコツと笑いながら、自分のやった行いに気づいていない。
ってか頭痛くないのだろうか。

「いや…見ての通り流血中だが？」

彼女はまたニコツと笑うと俺の立派に折れた鼻に向かって人差し指
を突き立てる。

すると流血は止まり、折れた鼻が再生する。

「え？…どういうこと？」

俺は今起きた現象に戸惑いを隠せなかった。
そんなびっくりした俺を見て彼女は口を開く。

「所詮はプログラム：0と1の改変でどうにでもなるんです」

彼女が何を言っているのかわからなかったが、一応お礼はしておく

ことにした。

「まあ助かった…でさ、お前名前は？」

「名前は…ありません」

「そうか。俺らと一緒に…ってことは管理番号とかはあるのか？」

「えっと、管理番号は監査プログラムー0015だと思います」

俺は驚いた。

監査プログラムとは経営側が開発したコンピュータキャラの事で、ゲームバランスを維持したりコントロールしたりするために動いている。

ちなみにここの管理をしている看守も監査プログラムである。

「監査プログラムのお前がなぜここへ？」

彼女が首を横にかしげているところを見ると彼女にもわかっていないようであった。

しかし、監査プログラムと一緒にの牢になるなんてもしかしたら…。そういえば前に聞いたことがあった。

バグもちの監査プログラムは即廃棄処分にされると。

だが、もしその廃棄過程で勇者候補生の再生過程に紛れていたとしたら？

これはとんでもないどんでん返しが出来るかもしれない。

「あのさ、お前なんかのバグもち？」

「バグかは知らないけど…こんなことなら」

彼女は牢の鉄折に触ると、それが消えるようにきれいな穴が開いた。どうやらこいつある程度のバグもちのようだ。

もしこいつを仲間にできれば上の世界の勇者なんか目じゃない。操作プレイヤーなんていなくても勇者になれる。もちろん俺は提案する。

「あのさ… この牢獄から一緒に出ないか？」

「うーん。暇つぶしになるのなら行きます」

つとあっさりな回答だった。

「んじゃ行くか」

「はい」

そしてこの出会いが俺の勇者じゃない勇者の大いなる活躍の一コマ目になるのであった。

第2話 【EXIT】（前書き）

どうも、遅れましたが2話の投稿になります。テスト上がりに書いたので出来は微妙ですが読んでくれれば幸いです。もし誤字、脱字があればよろしくお願いします。

第2話 【EXIT】

さってと…これからどうするべきなのか。

俺は隣に白ワンピの少女を連れて監獄の薄暗い廊下を歩いていた。

「あのさ…堂々と歩いてるけど見つかったら即行処分だよな？」

「そうですね？」

あっさりだな。

まあ何にしても今の状況は、脱獄した奴の取る行動ではないわ。

「あのさ…」

「何でしょう？」

「俺の格好どうにかならないかな？」

「うーん…まあやってみましょう」

少女は俺の前に構えると、俺の腹に手をあてる。

「サーチ開始 パスチェック…クリア インストール開始」

俺の服装は見る見るうちに変化を遂げていき、最終的には看守と同じ黒装束に代わった。

そして、少女は自分の服も看守と同じ装束へと変える。

「お前の能力便利だなあ」

「そんなこともないですよ」

「いや、そんなことあるぞ！俺も欲しいもんだ」

「いえ、持たないほうがいいですよこんな能力…」

少女の顔が若干曇って見えた。

しかしこれでバレてリサイクルという確率は格段に下がったが…ここからどうするべきだろうか。

この監獄の事はあまりよくわからない。

まあここで黙っててもしかたない、少し探索してみるか。

暗い通路を歩いていると、少女が横から問いかけてくる。

「あの」

「どした？」

「唐突ですが、私はあなたの事をなんて呼べばいいですか？」

「適当でいいんだが…」

「適當っていうのが一番困るんですが」

「そうか…なら兄さんとでも呼んでくれ」

「兄さん…」

「…」

「なぜ、兄さんなんですか？」

「何か無難じゃない？」

「そうでもないと思いますけど」

「まあいいじゃん。お前の正体も少しは隠せそうだし」

「そうですか…了解しました。…兄さん」

兄さん…

兄さん…

自分で呼ばせといてなんだが、非常に燃えるじゃないかああああ。なんか違う方に目覚めてしまいそうな勢いだよ。

いかんいかん。だめだ少し抑えよう、あまり行き過ぎると俺の手から離れていきそうだ。

そうだ、俺だけ呼んでもらうのもなんかあれだから、俺もこいつの事をなんて呼ぶか決めとかなきゃならんな。

「お前、なんか呼ばれてた名前とか、呼ばれたい名前とかあるのか？」

「いえ…特には」

「そっか。んじゃ俺が命名する！」

「…」

「…よし！決まった！お前はこれから“リン”と名乗れ」

「分かりました。それで理由というのは？」

「いや…今考え付いた感じ？まあいいからそういうことにしてくれ。ハズい」

「分かりました。リン…私の名前」

まあそんなかんじでお互いの呼称を決定したわけだが、根本に戻る
と俺たちはどうすればいいんだ？

この監獄を抜け出さなければいけない訳だが…。

ここを抜ける手段を考えなければ。

ここは話によると地下の大監獄、出るのには一苦労だな。

そして今自分たちのいる場所さえ把握できていない。

まずはそれをつかまなければ話にならん。

「よし、少し情報収集をするぞ！」

「兄さん。情報収集はいいんですがおもにどうするかを明確にしておいた方がいいのでは？」

「そうね」

「∴」

「リンさん。どうにかありませんか？」

「∴ちよつと待ってください。ちよつと調べます」

「おう」

そういうとリンは腕からモニターを出し、キーパネルをたたき始めた。

いやしかし俺は本当に運が良かったな。

まさかこんな形で地獄の牢から出ることが出来るなんて、マップに出たら何をしよう。

まあ正式な勇者でもなければ、NPCでもない俺がマップに出たら監査にバグとしてスリーパーされることは間違いなさそうだ。

そこをリンさんになんとかしていただかなければ∴。

「あの兄さん」

「ん？分かったのか？」

「はい」

「んで、ここはどのあたりなのよ」

「それでは、わかりやすく表示しますね」

そういうとリンの手元のモニターらしきものに地図、現在地、看守の位置などが示される。

マップ上で多数多色の丸がモニター上の地図の上でせわしなく動き回っている。

「これどっからもってきたのよ」

「これは管理中枢の“マザーシステム”からいただいてきました」

「ってことはこれ、監視用のデータマップ？」

「そうなりますね」

「∴俺たちの位置把握されてるんじゃない？」

「いえ、さっき侵入したときに私たち発信信号にプロテクトをかけたんで問題はないはずですよ」

「お前すごいなWW」

「それでここからの脱出ルートですが」

リンのモニターの表示が変わり、この監獄の脱出口であろう所に赤

いマークが表示される。

しかしマークが1つしかついていないということは脱出口は1つしかない。

しかもそのマークがあるのはF1つまり一階である。

「気づきました？」

「ああ、ここ地下53階…なかなかの無理ゲーだな」

「そうですね」

「なんかテレポートみたいなことできないの？」

「できますよ？」

「出来んのかい!!」

「できますけど、兄さんの場合は転送から再構築まで少し時間がかかってしまいます」

「それくらい問題ないんじゃない？」

「いえ、再構築中に何か衝撃がありますとそこで転送終了になります」

「そうなる…?」

「体が、スパッ!です」

体が…スパツ？

それはマズイな。そうなたら俺の地上での偉大な活躍計画が白紙どころか、その紙さえ燃えて炭になってしまう。

しかし、これをやるのとやらないのでは決定的な違いが出てくる。このまま死に物狂いで上を目指すか、瞬間的に命を懸けてすぐさま脱出するか…。

「あのさ、この監獄から地上に抜けることは無理なのか？」

「無理ですね。この監獄は内部や外部からの干渉を絶つために絶対
プロテクト
防御がかけられています」

「ちなみにこの転送の勝算はどれくらいだ？」

「一概には言えませんが、敵数を考えると…20%といったところでしょうか」

「2割か…」

「どうします？」

「やるしかないだろ。ちまちま行動してたら万事が遅れる」

「分かりました。では準備を始めます」

そういうとリンはキーパネルを出現させて、高速でコードを打ち込んでいく。

どうやら、牢に穴をあけるのとは勝手が違うらしく手をかざすだけ

では発動しないらしい。

「それでテレポートってどういう感じなんだ？」

「地上でいうマップ移動みたいなものです」

「そんな単純なのか？」

「いえ。マップ上の移動ポイントはそう何重ものプログラムが組まれているからすんなりいきますが、私たちが行うのは即席の移動プログラム。いわゆる人為的に作り出したバグなので探知されやすく、なにより不測の事態いつ起こるかわからないのです」

「…大体わかった。失敗したら死ぬんだな？」

「まあそういうことです」

死ぬわけにはいかん。絶対にだ！

「準備が完了しました」

「おう！始めてくれ」

「あ。兄さん何かあった時のためにこれを」

リンがそう言いながら棒状の何かを手渡してくる。

「ナニコレ？」

「言わずと知れた“ひのきのぼう”ですが？」

「勇者でもない俺に魔王でも倒せと？」

「いえ、看守に囲まれたらこれで対処してください」

「いや、無理でしょ!!」

「それでは始めます！！ターゲット位置補足…転送位置座標確定…転送データへの変換を開始します」

「ちよつと待ってええええええ」

だが俺の待つてええええもむなく俺は粒子状の物体となつて床、天井を駆け上がっていく。

まさに“データ”のようである。

ぐわっ！！

“再構築を開始します”

「もうてっぺんについたのか」

まさに高速。

俺の頭から徐々に構築されていき手に持った“ひのきのぼう”まで終わった。

“再構築率56%”

「あと半分か」

その時であった。

看守の一人が下半身がない状態の看守服を着た俺に気付く。

「お前どうした!?!」

ヤバイ!逃げなきゃ!!

と思って足を動かそうとするが、足がまだ転送されてきていないため動かない。

「貴様看守じゃないなあああ!!」

「バレた!!」

看守は手に持っていた槍らしき武器を構え俺の方へ全力で向かってくる。

し、しかたがないこれを使うしかない!!

「かかってこいやあああああ!!」

“ひのきのぼう”を片手に上半身だけで構える俺。何とも無様。
看守はそれを見て勝利を確信したのかにやりと笑みを浮かべて俺に突っ込んでくる。

「死ねやーーーーー!!」

「ぎゃあああ助けてーーーー」

キューイイイイン

な、何事だ!?

俺の“ひのきのぼう”が光っている?
ま、まさか俺の力に反応して…!?

「う、うわわわ!?!」

看守も“ひのきのぼう”から発せられる光に驚き動きが止まっている。

こ、これが俺に隠された力だったのか。
その時だった、床から無数の粒子が俺の前で形作っていく。

「お待たせいたしました」

「!？」

「コード強制終了」
アポート

「うががが…」

ストン

リンは看守を1人を仕留めて満足げである。

「兄さんもう動けますよ？」

「あ…ああ」

「それでは、外へ出ましょうか」

ようやく長かった（時間的には短いが、精神的には長い）監獄脱出
が現実のものとなり、外へと出られることになった。

希望はここから。

冒険もここから。

だけど魔王は倒さない。

「俺、勇者じゃないからWW」

第3話 【召喚されたような召喚術師】（前書き）

久々の投稿……。ぶれたかな？

第3話 【召喚されたような召喚術師】

俺たち二人は監獄を脱出しその上に存在する“存在が無い森”を歩いていた。

ここは、さっきの監獄同様一般プレイヤーには見えない仕様になっており、2重で監獄を隠している。

そんな森を抜ければ正規のマップは目の前だ。

「いやゝしかしほんと大変だった」

「そうですね」

「そういえばあの“ひのきのぼう”何で光ったの？」

「いえ、ただの時間稼ぎになればと思いましたがつけておきました」

ちょ…時間稼ぎって。

“こ、これが俺に隠された力だったのか”とか言っていた自分が少し前にいたような…。

なぜかすごいむなしさに駆られる。

「ちなみにその“ひのきのぼう”ですが、兄さんにプレゼントします」

「え、あ、ありがとう…」

これもらったところで何の役に立つのだろう。
まあリンからのプレゼントということで取っておくことにした。

“勇者候（ryはひのきのぼうを手に入れた”

チャッチャラーww

さて、監獄から抜けられたわけだが、いざとなってみると意外とやろうと思うことがないことに気づく。

この存在がない森を抜ければ正規のマップとなる。

あたりには勇者のコミュニティやチームなどが現れるだろ。

そして、このゲームの醍醐味は何と言っても“チーム同士の戦い”である。

敵モンスターは他のチームが現れるまでの簡単なレベル上げに過ぎない。

「なあリン」

「なんででしょう？」

「チーム2人って少なくね？」

「チームというよりはコンビですね」

「コンビ…」

確かに俺たちはチームというよりはコンビ。
まあリンがいればその辺の似非勇者なんかには負けないと思うが、
やはり格好上3人くらいにしたいものである。
そこで俺はリンに聞いてみる。

「あのさ、1人ほど仲間作成できない？」

「データ上ならできることはできますが」

「データ上？」

「はい。実際は2人ですが、データ上は3人居ることに出来るということです」

「いや、そうじゃなく実体の仲間が欲しいんだな」

「それは無理です。キャラクターの作成権限はマザーシステムにしか存在しません」

「んゝ。仕方ない…自力で見つけるか」

とは言ったもののどんな奴を仲間にしようか…。
俺は構想にふける。

1. 白髪フード被った強そうな魔術師。

2. ムキムキでああーな大剣担いだ剣士。

3. めっさかわいいロリロリメイド。

4. 狙った相手は抹殺するゲジマユなスナイパー。

5. 体がゴムのような麦わら帽子の似合う海賊。

「…後半はどこぞの主人公達じゃないですか」

リンの冷静な突込みが入る。

結構いい案だと思ったのに…。
はぁ誰かいらないものか。

そんな時だった。

「おい、お前ら」

「ん？なんか聞こえなかったか？」

「いえ」

「気のせいか」

足を進める。

「おい、なんで無視するのだ？」

「なんか聞こえたよな？」

「え、あ、はい」

だが、声は聞こえるが姿が見えない。

そしてついでに言っておくが、ここは存在がない森。一般プレイヤーが入ることはまずできないのである。

もしこの森に入れるとすれば、俺のように監獄から逃げ出してきた勇者のなり損ないか、リンのようにバグを持っているかくらいなんだが…。

「おい、こっちだこっち下下なのだ!!」

言われるがまま俺たちは目線を下に落とす。

そこにいたのは、手に乗るくらいのサイズの犬らしき生物であった。しかも立派に言葉はしゃべる、二足歩行と来たもんだ。

「やっと気づいたか」

「お前…何者だ!？」

「ふッ。聞きたいのだ？」

「ごくっ…」

「それじゃ、教えてやろう。ワンスケちゃんは最強の召喚術師なのであるのだ」

……。

二足歩行の言葉をしゃべる犬…。

そして三頭身というルックス。

それで、召喚術師…。

「いや、逆だろ？」

「何が？」

「いや、お前が召喚されただろ？」

「ちぎゃーう！！ワンスケちゃんが召喚するのだ！！」

「はぁ。ただの雑魚かよ期待して損した」

「ぎ、雑魚…？」

「どうせお前、監獄でリサイクル失敗した敵キャラのなり損ないだろ？」

「お前、ワンスケちゃんをなめてるのだ？」

「いや、なめてはいない。俺忙しいから！じゃ！」

「待つのだ！」

「何よ？」

「勝負なのだ！」

「はあ。雑魚狩りは趣味じゃないんだが？」

「いいからかかってくるのだ」

どうやら倒すまでそこをどくはないようである。

通ろうとすれば犬を踏み潰せばいけないことは無いと思うんだが…。

勇者を目指していた者として勝負を挑まれたからには、真正面から戦わないと格好がつかない気がする。

「貴様のような似非勇者なんかイチコロなのだ」

犬は相当自信満々らしく鼻息を荒げている。

まあ小さいからぜんぜん迫力というものが無いがな。

「リン。情報は解析できているか？」

「……マザーで検索したけど照合データとは一致しなかった」

「ってことはやっぱりバグの可能性があるな…」

「敵の力は未知数。兄さんこれを」

リンが俺の前に若干強そうな剣を俺の前に差し出す。

「これは？」

「一応、勇者の中盤平均レベルの装備を用意しました」

「俺、下級どころか勇者でもないんだが大丈夫か？」

「大丈夫です。肩書は勇者にしておきましたし、レベルもそれなりに調整しておいたのでそれなりに戦えるはずですよ」

「そうか、ありがとう。ところでお前は どうする？」

「私は、後ろで兄さんのバックアップをします」

「分かった。背中が預けるぞ！！」

俺はリンから剣を受け取ると、体が光り監獄で看守服に代わったように今度は勇者の鎧へと変わった。

こんなにいいものを与えてもらって負けるわけにはいかない。というより、敵は犬のモンスター一匹。負けるわけがない。

俺は犬の方を向き、剣を構える。

「話し合いは終わったのか？」

「ああ。じゃ、始めようか」

「それじゃ遠慮なくいくじょー！ー！」

「うらあああああ」

俺は剣を振り上げ犬の方へ向かって突っ込む。

だが、犬の方は微動だにしない。

犬だろうとモンスターだろうと関係ない俺は犬の頭上で剣を振り下ろす。

「ワンスケちゃんを守るのだああ！ー！出でよ“ステージ18のボス！ー！森の苦魔^{クマ}さん！ー！”」

「ぼ、ボスだと！？」

「だから、なめるなど言ったのだ。ワンスケちゃんはほかの召喚術師と違い敵キャラを召喚できるのだ」

「んなバカなあああ」

「消えろ」

「兄さんッ！ー！」

俺の攻撃は犬の前に召喚されたボスに当たり見事弾かれた。そして次の瞬間、斬撃の発生とともに俺の体は数十メートル吹き飛

ばされていた。

今から冒険だ！って時にボスって…。

どんな勇者でもこれは積むでしようが。

こんな積みゲー見たこと無いよ…。

「くッ…」

「やっぱりたいしたことないな」

「くそ…」

「だから言ったのだろお前じゃ勝てない！！」

こんな犬ごときに負けるなんて俺のプライドが許さない。

だが、犬の前には強固なボスの存在がある。

俺はどう立ち回ればいい…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1552v/>

勇者じゃない勇者のRPG

2011年10月10日10時43分発行